



現地の子どもたちと交流するラオス事務所長の加瀬さん。「住んでいる場所や環境に左右されことなく、将来や希望を選択できる社会になってほしい」

PLAYERS

国際協力の担い手たち

公益社団法人 シャンティ国際ボランティア会 村の学校を救うために

近年、都市部を中心に経済成長が目覚ましいラオス。しかし地方の生活は貧しく、子どもたちの教育にも影響が及んでいる。村の学校の厳しい環境を改善するため、先生と行政官が立ち上がった。



ルアンパバーン県ヴィエンカム郡の学校。片道2時間ほどの道のりを歩いて通う子どもたちもいる

無い無い尽くしの複式学級

薄暗い教室で、一冊の教科書を奪い合うように囲む子どもたち。2人掛けの椅子に4、5人がひしめき合って座り、中

には授業に興味を持たず、ふらふらと外へ出て行ってしまいうも。先生の姿は見当たらない。

「先生、教材、教室など、全てにおいて無い無い尽くしの状態でした」
今から2年前、ラオス北部、ルアンパ

いといわれるヴィエンカム郡。それ故に、子どもたちの教育も厳しい環境にある。雨期になると浸水してびしょびしょになってしまう校舎、乾期でも大きな川を渡らないとたどり着けないような学校。農作業をする両親の手伝いやきょうだいの世話などに追われ、卒業せずに辞めてしまいうも少なくない。

そして、学校に通えなくなるもう一つの理由。それは、この地域ならではの「言語」の問題だ。人口の8割以上が少数民族のこの地域には、民族の数だけ言語がある。しかし、学校で使われるのは公用語のラオス語。授業や教科書の内容をなかなか理解できない。

加瀬さんは、これまで青年海外協力隊や他のNGOスタッフなどとして、アジア各地の教育支援に携わってきた。それでもラオスで特に驚いたのは、一人の先

生がいくつもの学年を掛け持ちで担当する「複式学級」だ。一コマの中で、3つの学年を渡り歩く…。そんなことも珍しくない。

「より困難な人々へ届く活動」を motto に、長年にわたり、ラオスで教材作成や図書館整備などの支援を続けてきたシャンティ。教育行政官らと話し合いを重ねた結果、次のステップの支援としてたどり着いたのは、少数民族の子どもたちへの教育の質を上げるため、指導力を高めることだった。

教育環境の改善に向けて立場を超えた協力を

先生の数が不足しているため、今すぐ複式学級を完全になくすことは難しい。そこでJICA草の根技術協力事業を通じて力を入れているのが、複式学級の運営能力を高める研修だ。「指導に集中できず、授業が煩雑になってしまふ」「先生不在でも子どもが意欲的に自主学習



「現場で苦悩する先生たちに役立つ研修をしたい」と、トレーナー研修に励む郡の行政官たち



研修用に作成したガイドブック

をできないか」。そんな現場の声に伝えるために、模擬授業やグループワークなどをふんだんに取り入れた学びの場を設けることに。対象は、郡内の約240人の先生、中央の教育スポーツ省、県や郡の教育局の職員などだ。

しかし、「すぐに壁にぶち当たりました」と加瀬さん。現場に根差した研修にしようとして、事前に先生たちの悩みを聞きこうとしたが、集まった全員が黙って聞いてしまった。自分たちを評価する立場にある中央や県、郡の職員を前に、本音を発言することに抵抗があったのだ。そこで加瀬さんらは、食事会を開くなどして両者の関係を深める場をつくり、先生の苦悩や子どもたちへの思い、目指すべき教育の在り方とことごとく話した。そうするうちに、「研修で学んだ知識や技能を、実際の授業で継続的に活用できるように、私たちも全力でサポートしたい」。そんな声が、行政官から聞こえるようになった。



郡教育局の職員と加瀬さん(左から4人目)。ヴィエンカム郡出身の行政官と先生たちは、同じ目標に向かって進んでいる



研修参加者の中には、子どもを抱えた母親や1週間分の大荷物を背負って来る先生もいる

そこで加瀬さんたちは、さらに「複式学級運営トレーナー養成」講座を企画。指導案作成のセッションでは、先生と行政官が顔を突き合わせながら、「授業の流れを学年に合わせて修正しよう」「自習時間でも集中できる質問を設けよう」など、たくさんの改善案が飛び交い、実際の授業で生かされる仕組みができていく。

最終的な目標は、少数民族の子どもたちも楽しく学べる環境づくり。ラオス語に慣れ親しんでもらおうと、加瀬さんらは、食べ物や小物などの絵を添えた単語カード、民族に伝わる昔話の絵本などの補助教材を作り、その活用方法なども先生たちに伝えている。

「少数民族の子どもたちも学び続けてほしい」。その思いを一つにした先生と行政官。子どもたちのより良い教育につながるよう、シャンティのスタッフはこれからも現場に寄り添いながら走り続けていく。